

第 16 非常警報設備

1 用語の定義

(1) 共通事項

ア 報知区域とは、1 回線における当該回路の音響装置の鳴動区域をいう。

イ 警報音とは、非常ベル又は自動式サイレンと同等以上の音響又は電氣的音信号（放送設備の音声警報における第一シグナル音及び第二シグナル音を含む。）をいう。

(2) 放送設備関係

ア 遠隔操作器とは、防火対象物の使用形態により、放送場所が複数となる場合に使用できる単独の操作部をいう。

イ 複数回線とは、一の報知区域を 2 以上のスピーカー回路により構成することをいう。

ウ スピーカー回路分割装置とは、一のスピーカー回路を 2 以上に分割する装置をいう。

エ 通話装置とは、省令第 25 条の 2 第 2 項第 2 号に規定される起動装置に附置する防災センター等と通話することができる装置をいう。

オ 複数回線化とは、一の報知区域において、スピーカー回路を複数とするか、回路分割装置を用いて当該スピーカー回路を 2 以上に分割することをいう。

カ 放送区域とは、防火対象物の 2 以上の階にわたらず、かつ、床、壁又は戸（障子、ふすま等遮音性の著しく低いものを除く。）で区画された部分をいう。

キ 音声警報とは、シグナル音及び女声又は男声メッセージで構成される警報をいう。

ク 感知器発報放送とは、音声警報のうち、第一シグナル音及び自動火災報知設備の感知器が作動した旨の女声メッセージにより構成されたものをいう。

ケ 火災放送とは、音声警報のうち、第一シグナル音、火災である旨の男声メッセージ及び第二シグナル音で構成されるものをいう。

コ 非火災報放送とは、音声警報のうち、第一シグナル音及び自動火災報知設備の感知器の作動は火災ではなかった旨の女声メッセージで構成されるものをいう。

サ マイクロホン放送とは、人がマイクロホンにより放送することをいう。

シ 階別信号とは、感知器発報放送を開始するための自動火災報知設備の感知器作動による階別の信号をいう。

ス 確認信号とは、火災放送を開始するための自動火災報知設備の発信機、非常電話等が起動された旨の信号をいう。

セ 性能規定とは、省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号ハの規定をいう。

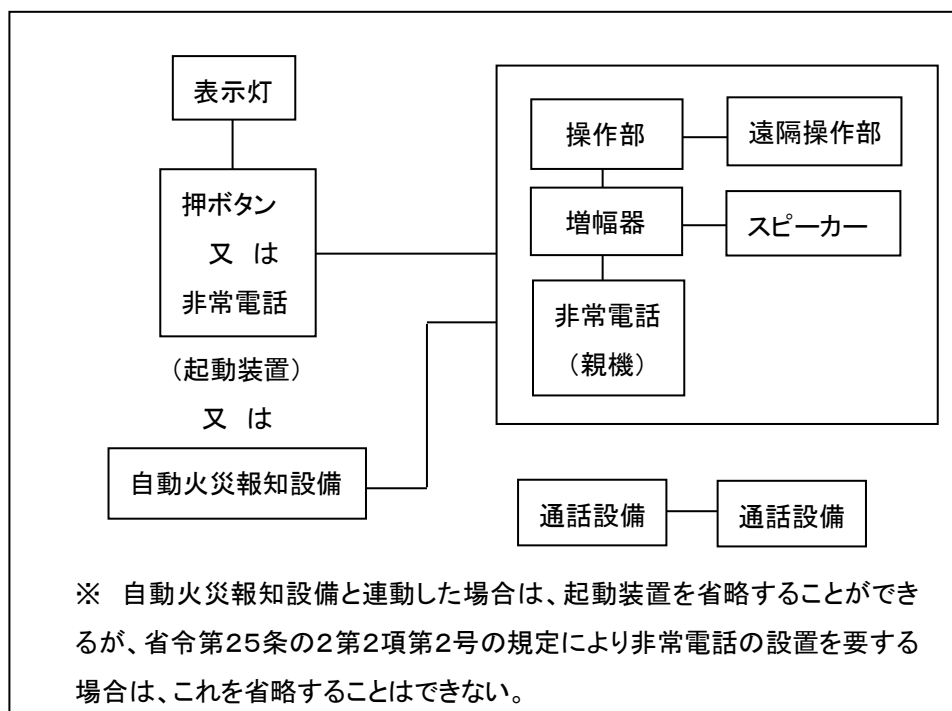
(3) 非常ベル、自動式サイレン関係

ア 1 回線用とは、操作部等の部分に地区表示灯を有しないものをいい、一斉鳴動で対応できる一般に小規模防火対象物に設置されるものをいう。

イ 多回線用とは、操作部等の部分に回線ごとの地区表示灯等を有するものをいい、小規模防火対象物以外にも設置されるものをいう。

2 放送設備

放送設備とは、起動装置、表示灯、スピーカー、操作部（遠隔操作器を含む。）、増幅器、電源及び配線で構成されるもの（自動火災報知設備と連動するものは、起動装置及び表示灯を省略したものを含む。）をいう（第16－1図）。



第16－1図 放送設備の構成例

（1）増幅器等

増幅器等とは、起動装置若しくは自動火災報知設備からの階別信号又は確認信号を受信し、スイッチ等を自動的に又は手動により操作して、音声警報による感知器発報放送、火災放送、非火災放送若しくはマイクロホン放送をスピーカーを通じて有効な音量で必要な階に行う増幅器、操作部及び遠隔操作器をいい、次に適合すること。

ア 常用電源（交流電源）

（ア）電源電圧は、増幅器の所要入力電圧に適合していること。

（イ）電源回路は、専用とすること。ただし、他の消防用設備等の電源を放送設備の電源と共用する場合で、これにより放送設備に障害を及ぼすおそれがないときは、共用することができる。

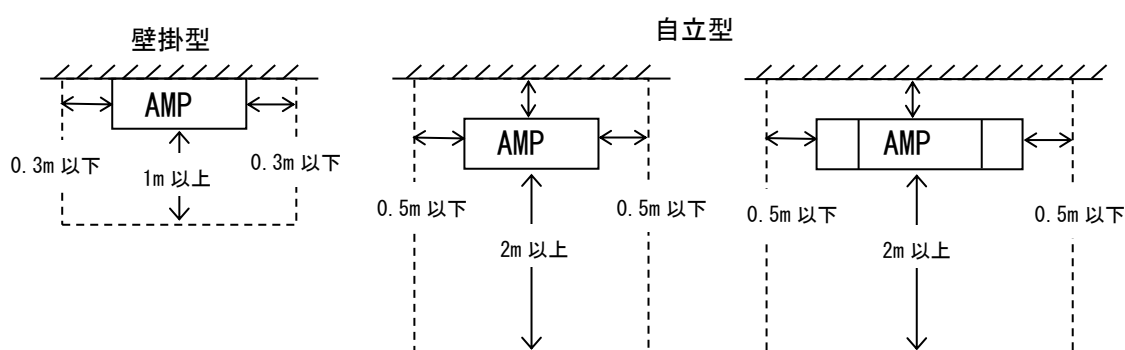
（ウ）開閉器等の見やすい箇所に、非常警報設備専用である旨の赤色の表示を付しておくこと。◆

イ 非常電源

非常電源及び非常電源回路の配線は、第 5 章第 3 非常電源の例によること。

ウ 設置場所

- (ア) 一の防火対象物に 2 以上の操作部又は遠隔操作器を設ける場合であっても、一のものは、常時人のいる守衛室、防災センター又は中央監視室等に設けること。
- (イ) 自動火災報知設備の受信機又は副受信機と併設すること。
- (ウ) 避難階、その直上階又は直下階の避難上有効な出入口付近の場所に設けること。ただし、安全に避難でき、かつ、壁、床及び天井が不燃材料で造られており、開口部に防火戸を設けた場所に設置する場合は、この限りではない。
- (エ) 温度、湿度、衝撃、振動等の影響を受けるおそれのない場所に設置すること。
- (オ) 操作上又は点検上必要な空間を確保すること（第 16－2 図）。



第 16－2 図 点検及び操作上有効な空間例

- (カ) 地震等の振動による障害がないよう堅ろう、かつ、傾きのないように設置すること。

エ 機器

- (ア) 「非常警報設備の基準」(昭和 48 年消防庁告示第 6 号。以下第 16 において「告示基準」という。) に適合したものとし、認定品を使用すること。
- (イ) 増設工事等が予想される場合は、増幅器等に余裕回線を残しておくこと。
- (ウ) 自動火災報知設備等と連動する場合は、無電圧メーク接点により、相互の機能に異常を生じないものであること。
- (エ) 増幅器の出力とスピーカー等の合成インピーダンスは、次式 a を満足し整合（インピーダンスマッチング）したものであること。ただし、増幅器の定格出力時の音声信号電圧が 100V に統一されたハイインピーダンス方式を用いたものは、次式 b によることができる。

a 算定式

$$P(w) \geq \frac{E^2(V)}{Z(Q)}$$

P：増幅器の定格出力

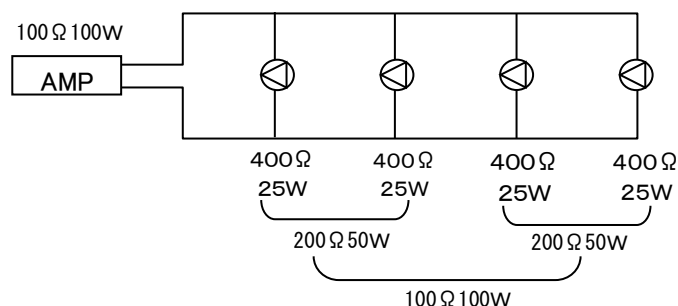
E：スピーカーの回路電圧

Z：スピーカー等の合成インピーダンス

スピーカー等の合成インピーダンスを求める計算式

(a) 並列接続の場合 (第 16-3 図)

$$Z_0 = \frac{1}{\frac{1}{Z_1} + \frac{1}{Z_2} + \frac{1}{Z_3} + \dots + \frac{1}{Z_n}}$$

Z₀ : 合成インピーダンスZ₁ ~ Z_n : スピーカーのインピーダンス

第 16-3 図

(b) 直列接続の場合

$$Z_0 = Z_1 + Z_2 + Z_3 + \dots + Z_n$$

b 算定式

$$P(w) \geq S(w)$$

S : スピーカーの定格入力合計

(オ) 起動は、次によること。

a 自動火災報知設備との連動により起動する場合

(a) 自動火災報知設備からの階別信号の受信により、自動的に感知器発報放送が行えるものであること。

(b) 確認信号の受信により、自動的に火災放送に移行するものであること。

b 起動装置 (押しボタン又は発信機) により起動する場合

自動的に感知器発報放送及び火災放送を行うものであること。

なお、感知器発報放送を省略して火災放送を行うこともできるものであること。

(カ) 放送設備を業務用の目的と共用するものにあつては、起動装置等による信号を受信し、非常放送として起動された場合、直ちに、かつ、自動的に非常放送以外の放送 (地震動予報等に係る放送 (緊急地震速報) であつて、これに要する時間が短時間であり、かつ、火災の発生を有効に報知することを妨げないものを除く。) を停止できること。◆

(キ) 一の防火対象物において、非常用の放送設備以外の業務を目的とした放送設備が独立して設けられている場合は、非常用の放送設備を操作した際、音声警報が有効に聞こえる措置を講じること。

(ク) 全区域に火災を報知することができる操作部又は遠隔操作器が一以上、常時人のいる場所に設けられている防火対象物で、次の場合は、省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号ヲの規定にかかわらず、遠隔操作器等から報知できる区域を防火対象物の全区域としないことができる。

a 管理区分又は用途が異なる一の防火対象物で、操作部等から遠隔操作器等

が設けられた管理区分又は用途の部分全体に火災を報知することができるよう措置された場合

- b 防火対象物の構造、使用形態等から判断して、火災発生時の避難が防火対象物の部分ごとに独立して行われると考えられる場合であって、独立した部分に設けられた遠隔操作器等が独立した部分全体に火災を報知することができるよう措置された場合
- c ナースステーション等に遠隔操作器等を設けて病室の入院患者等の避難誘導を行う等、防火対象物の一定の場所のみを避難誘導の対象とすることが適切と考えられる場合であって、避難誘導の対象場所全体に火災を報知することができるよう措置された場合

オ 表示等

(ア) 放送階選択スイッチの部分には、報知区域の名称等が適正に記入されていること。

(イ) 操作部又は遠隔操作器の付近に、報知区域一覧図を備えること。

(2) 報知区域及び鳴動方式

ア 報知区域は、原則として階別とする。

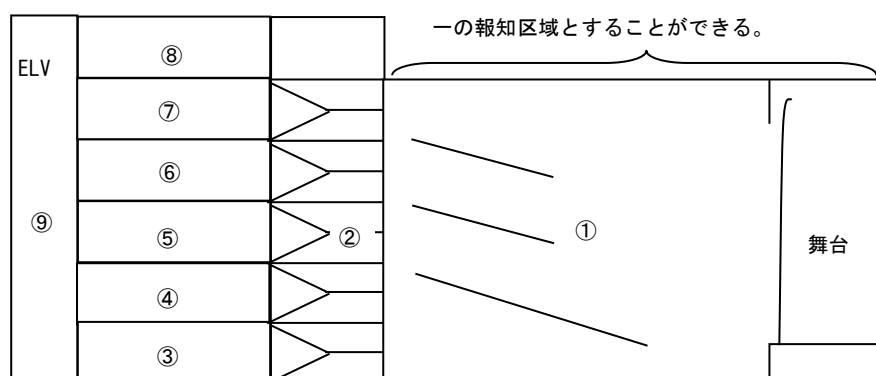
イ 特別避難階段等は、居室等の部分と別な報知区域に設定され、かつ、最下階を基準とし、垂直距離 45m ごとに一報知区域とすること。

ウ エレベーター内の放送は、居室等の部分と別の報知区域として設定すること。

エ テレビスタジオ等の部分については、他の居室等の報知区域と別の報知区域に設定することができ、また、感知器等の作動と連動させないことができる。

オ 劇場等で階の一部が吹き抜けになっており、天井面等に取り付けたスピーカーにより有効な音量が得られる場合、当該部分は一の報知区域とすることができる。

(第 16-4 図)



第 16-4 図

カ 鳴動方法は、次による。

(ア) 省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号チによるものとし、必要に応じ全館一斉鳴動できるものであること。なお、第 16-1 表によるものとする。◆

- a 第 1 報の感知器が作動した場合は、感知器発報放送を鳴動させる。
- b 感知器発報放送から火災放送への移行は、火災であることが確実と判断で

きる次の確認信号を受信した場合とする。

- (a) 第1報の感知器の警戒区域以外の警戒区域の感知器からの火災信号
- (b) アナログ式自動火災報知設備等の火災信号を個別、かつ、多段階に識別できる自動火災報知設備については、第1報の感知器以外の感知器からの火災表示すべき煙濃度又は温度に達した旨の信号
- (c) 発信機、押しボタン、非常電話等からの信号

第16-1表

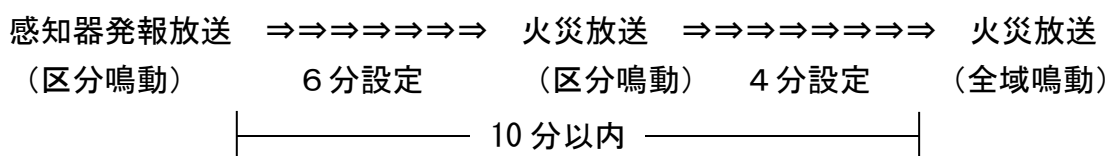
		(例1)	(例2)	(例3)	(例4)	(例5)
5 F						
4 F						
3 F		○				
2 F		◎	○			
1 F			◎	○	●	●
B1F			○	◎	○	○
B2F			○	○	◎	○
B3F			○	○	○	◎

(注) ◎印：出火階を示す（連動により自動的に鳴動する階）。

○印：同時放送階を示す（連動により自動的又は手動により鳴動する階）。

●印：地階部分の報知区域と同時に鳴動させることができるよう指導すること。

(イ) (ア) bの方式による火災信号の入力がない場合でも、第16-5図により感知器発報放送から全域火災放送への自動的に切り替わること。なお、防火対象物の用途、規模、管理体制等により、これによりがたい場合は、協議の上これと異なる設定とすることが出来る。ただし、この場合でも感知器発報放送から全域火災放送に至るまでの設定時間は10分を超えてはならない。



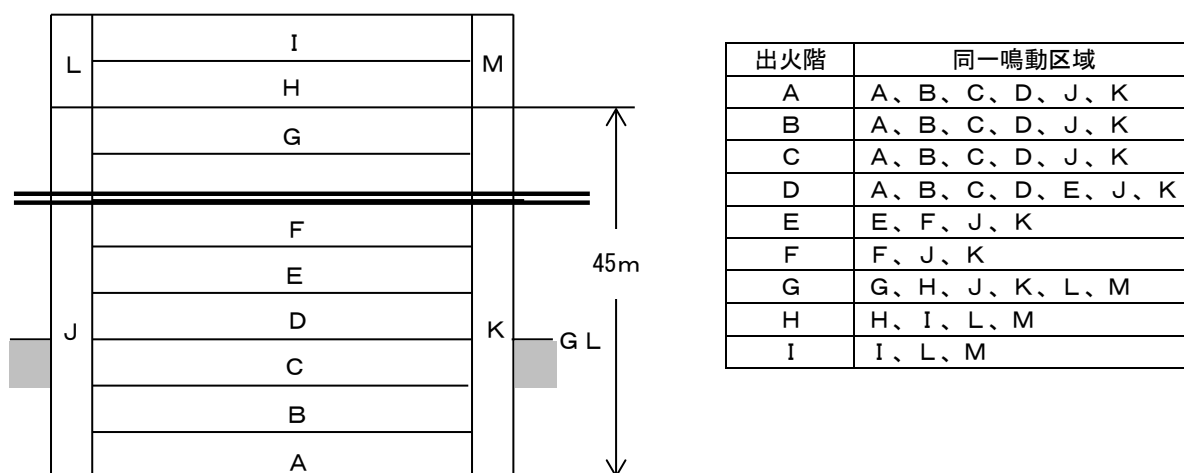
第16-5図

上記で設定した時間を増幅器の部分にそれぞれ「火災放送移行○分」「全域火災放送移行○分」と表示すること。

- (ウ) 感知器発報放送及び火災放送については、原則、繰り返し放送とすること。
- (エ) 階段、傾斜路、エレベーター昇降路、堅穴等に設置された感知器が作動した場合は、連動しないことができるものであること。ただし、エレベーター昇降路に設置された感知器が、エレベーター機械室の感知器と兼用されている場合は、当該機械室の存する階及びその直上階に放送できるものであること。

(オ) 特別避難階段以外の感知器の作動と連動して当該報知区域に接する特別避難階段等の報知区域及びその直上の報知区域を鳴動させること。(第 16-6 図)

ただし、階段内に放送した場合、避難上支障となるものについては連動しないことができる。



※ J、K、L、M は、特別避難階段等の報知区域

第 16-6 図 特別避難階段等の報知区域

(カ) 操作部の各スイッチの手動操作により行う場合。

- a 一斉作動スイッチを操作することにより全館に放送できること。
- b 放送階選択スイッチを操作することにより、当該スイッチに連動する任意な放送区域への放送ができること。

(キ) メッセージに外国語を使用する場合は、次に示す順とすること。

シグナル音 → 日本語メッセージ → 外国語メッセージ

(3) スピーカー

スピーカーとは、増幅器等の作動により、必要な階に有効な音量の音声警報による感知器発報放送、火災放送、非火災報放送又はマイクロホン放送を伝達するものをいい、次に適合すること。

ア 放送区域

(ア) 部屋の間仕切りについては、音の伝達に十分な開口部があるものを除き、固定式か移動式かにかかわらず、壁として取り扱うこと。

(イ) 省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号ロ (イ) かっこ書の障子、ふすま等遮音性の著しく低いものには、障子、ふすまのほか、カーテン、つい立て、すだれ、格子戸又はこれに類するものを含むものであるが、アコーディオンカーテンは含まないものであること。

なお、出入口の戸が障子、ふすま等であっても、出入口以外の部分が壁等で区画されている部屋は、原則として一放送区域とする。

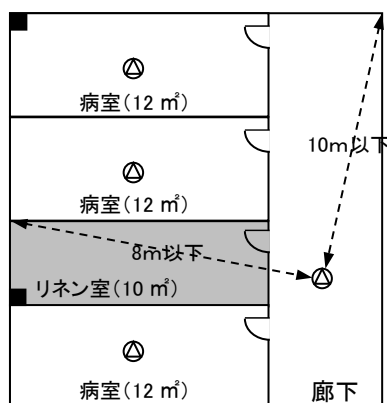
(ウ) 通常は、開放している移動式の壁又は戸であっても、閉鎖する可能性のあるものは、壁又は戸で区画されたものとして取り扱うこと。

(エ) 居室以外の部屋であっても、常時人のいる可能性の高い場所は、省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号ロ (ロ) ただし書にかかわらず、当該部分を一放送区域として

取り扱ってスピーカーを設置すること。

(オ) (5) 項ロに定める防火対象物の住戸は、一の放送区域として取り扱うことができるものとし、当該部分の床面積に応じて、省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号ロ (イ) によりスピーカーを設置すること。

(カ) 省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号ロ (ロ) ただし書に定めるスピーカーの設置を免除できる放送区域及びスピーカーの設置場所については、第 16-7 図及び第 16-8 図の例によること。◆



スピーカーの設置を要しない区域

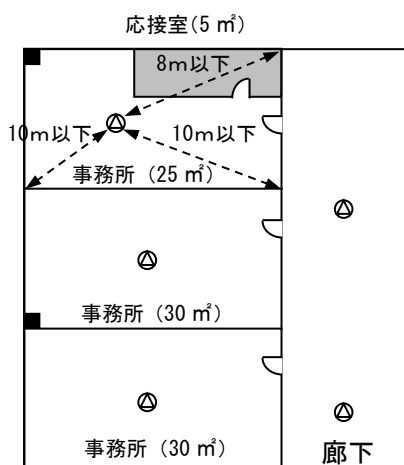
- ・居室 (6 m²以下)
- ・居室から地上に通じる主たる廊下その他の通路 (6 m²以下)
- ・上記以外の放送区域 (機械室・倉庫等で 30 m²以下のもの)

■ : スピーカーの設置を免除できる部分 (30 m²以下)

⊙ : スピーカー

第 16-7 図

居室又は居室から地上に通ずる主たる廊下その他の通路以外の場所で
スピーカーの設置を免除できる場所



スピーカーの設置を要しないものとして、居室及び居室から地上に通じる廊下その他の通路で 6 m²以下の放送区域をいう。

なお、スピーカーが設置されない放送区域は他の部分から隣接する他の放送区域のスピーカーまでの水平距離は 8 m 以下とする。

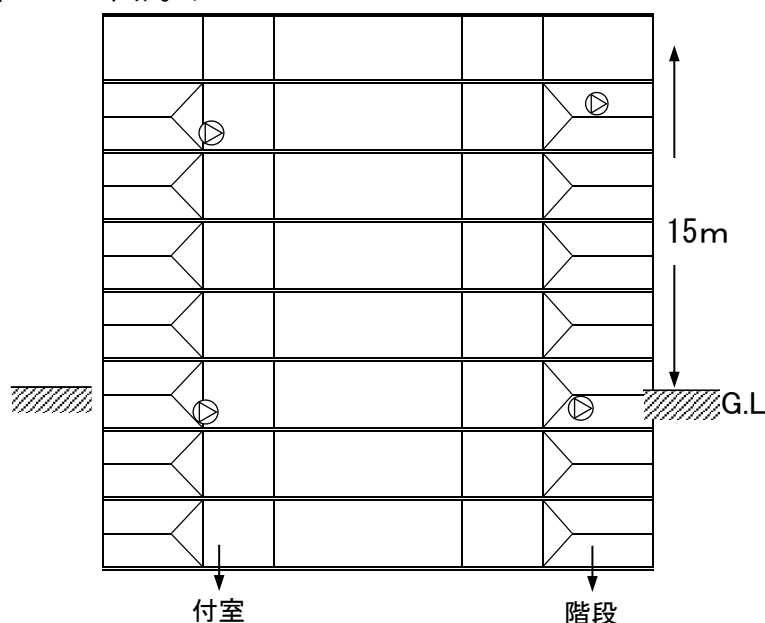
■ : スピーカーの設置を免除できる部分 (6 m²以下)

⊙ : スピーカー

第 16-8 図

居室でスピーカーの設置を免除できる場合

- a 居室とは、居間、寝室、台所（住宅及び共同住宅は除く。）、食堂、書斎、応接間、売り場、会議室、作業室、病室、診療室、宿泊室、観覧席、調理室、客室、控室等をいう。
 - b 非居室は、玄関、廊下、階段室、便所、洗面室、浴室（公衆浴場及び共同浴場は除く。）、脱衣室、倉庫、納戸、無人機械室、更衣室、湯沸室、自動車庫、リネン室等をいう。
- (キ) 防火対象物の屋上を、不特定多数の者が出入りする遊技場、ビヤガーデン等の目的で使用する場合は、当該部分にスピーカーを設けること。
- (ク) エレベーターの設置される防火対象物にあつては、エレベーター内にスピーカーを設けること。
- (ケ) 特別避難階段若しくは屋内避難階段又は直通階段（以下「特別避難階段等」という。）にあつては、垂直距離 15m以内にL級スピーカー 1 個以上を階段内に設けること（第 16－9図）。◆



第 16－9 図

イ 設置位置等

- (ア) 音響効果を妨げる障害物がない場所に設けること。
- (イ) 高温多湿となることが予想される場所に設けるスピーカーは、設置場所に適応したものを設けること。

ウ 性能規定

省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号ハによりスピーカーを設置する場合は、次によること。

- (ア) 性能規定によるスピーカーの設置は、主として、残響時間の長くなる地下駐車場等の放送区域や天井に設置することにより維持管理が困難となるアトリウム等の高天井かつ大空間となる放送区域に指導すること。
- (イ) 省令第 25 条の 2 第 2 項第 3 号ハ（イ）及び（ロ）の計算式の確認事項
 - a 音圧レベル P は、音声警報の火災放送第 2 シグナル音のうち第 3 音の音圧

レベルをいう。

- b 一般的に用いられているタイプのスピーカーの指向係数は、その指向特性区分に応じ、第 16－2 表に掲げる値とすることができる。

第 16－2 表

指向特性区分	該当するスピーカータイプ	指 向 係 数			
		0° 以上 15° 未満	15° 以上 30° 未満	30° 以上 60° 未満	60° 以上 90° 未満
W	コーン型スピーカー	5	5	3	0.8
M	ホーン型コーンスピーカー又は口径が 200mm 以下のホーンスピーカー	10	3	1	0.5
N	口径が 200mm を超えるホーンスピーカー	20	4	0.5	0.3

- c 当該箇所からスピーカーまでの距離 r は、放送区域のうち任意な場所で、床面からの高さが 1 m の箇所からスピーカーまでの直線距離をいう。

- d 放送区域の平均吸音率は、次によること。

- (a) 2 kHz における吸音率によること。

なお、残響時間の算定にあたっては、500Hz における吸音率による。

- (b) 通常の使用形態において開放されている開口部（自動火災報知設備と連動して閉鎖する防火戸等を含む。）の吸音率は、0.8 とすること。

- (c) 吸音率が異なる複数の建築材料が用いられている場合の平均吸音率は、次式により算定する。

$$\alpha = \frac{\sum S_n \alpha_n}{\sum S_n}$$

α : 平均吸音率
 S_n : 建築材料の面積 (単位 m^2)
 α_n : 建築材料の吸音率

- e 放送区域の壁、床、天井又は屋根の面積とは、当該放送区域を区画する壁、床、天井又は屋根のほか、これらに存する開口部を含めた面積の合計をいう。

- f 残響時間

- (a) 残響時間とは、放送区域内の音圧レベルが定常状態にあるとき、音源停止後から 60dB 小さくなるまでの時間をいう。

- (b) 残響時間は、次式により計算する。

$$T = 0.161 \frac{V}{S \alpha}$$

T : 残響時間 (単位 秒)
 V : 放送区域の体積 (単位 m^3)
 S : 放送区域の壁、床、天井又は屋根の合計の面積 (単位 m^2)
 α : 放送区域の平均吸音率

エ 機器

- (ア) 告示に適合するものであること。◆

- (イ) 認定品を使用すること。

オ 特例基準

スピーカーからの水平距離が 8 m を超える場所に可動式ブース（カラオケボックスその他これに類する遊興の用に供することを目的とするものを除く。）を設

ける場合、次に掲げる要件を満たすものについては、政令第 32 条を適用し当該ブース内にスピーカーの増設を要しないものとする。

(ア) 次の a 又は b の要件を満たすこと。

a 第 5 章第 4 スプリンクラー設備 1 (3) イ (イ) i (a) 並びに (c) I 及びⅢに掲げるものであること。

b 第 5 章第 4 スプリンクラー設備 1 (3) イ (イ) i (b) 並びに (c) I 及び (d) b から d までに掲げるものであること。

(イ) 次の a 又は b に掲げる要件を満たすこと。

a 当該可動式ブースの外に設置されたスピーカーによる放送について、当該可動式ブース内における音圧が 65dB 以上となることが確認できること。

b 次の (a) から (d) までに掲げる要件を満たすこと。

(a) スピーカーから第 1 シグナル (「非常警報設備の基準」 (昭和 48 年消防庁告示第 6 号) 第 4 第 3 号 (2) ニに規定する第 1 シグナルをいう。以下同じ。) が鳴動した時点で、当該可動式ブース内にいる者に対し、放送設備による火災警報がなされた旨を警報音 (65dB 以上の音圧のものに限る。) 及び発光により直ちに報知できる機器等 (放送設備の起動や第 1 シグナルの鳴動等に連動して有効かつ確実に作動すること (65dB 以上の音圧による警報音の鳴動及び発光の起動の状態を 1 分間以上継続できることをいう。以下同じ。) が実験等により確認されたものに限る。) が設置されていること。

(b) 当該可動式ブース内の見やすい箇所に、次に掲げる事項に係る表示が設けられていること。

I (a) の警報音及び発光は、可動式ブースの外における火災発生を知らせるものであること。

II (a) の警報音の鳴動及び発光の起動の際にとるべき行動 (可動式ブース外に出て、火災の発生や避難等の要否などを確認すること等)

(c) (a) の機器等の電源は、次に掲げる要件を満たすものであること。

I 「特定小規模施設用自動火災報知設備の設置及び維持に関する技術上の基準」 (平成 20 年消防庁告示第 25 号) 第 2 第 6 号の規定の例により設けられていること。

II 電池以外から供給される電力を用いる場合にあっては、当該電源が停電した場合であっても、(a) の機器等を 10 分間以上有効かつ確実に作動することが可能な状態に維持することができる容量の電池が設けられていること。

(d) (a) の機器等は、点検が実施され、適切に維持管理されていること。

(4) 複数回線化

ア 適用範囲

(ア) (5) 項、(6) 項及び (16) 項 ((5) 項及び (6) 項の用途に供する部分に限る。) の用途に供するもの

(イ) (ア)以外の防火対象物又はその階で、スプリンクラー設備が設けられていないもの（省令第13条等によりスプリンクラーヘッドが緩和されている部分を含む。）

イ 複数回線化の方法

次のいずれかの方法によること。

(ア) あらかじめ2以上のスピーカー回路により構成する方法

(イ) 回路分割装置により一のスピーカー回路を2以上に分割する方法

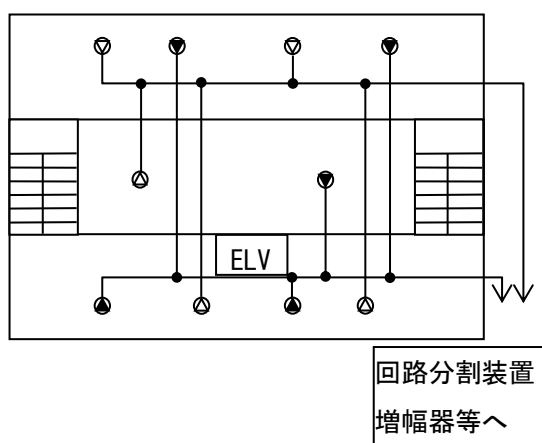
ウ 配線方法

次のいずれかの方法によること（第16-9図～第16-12図）。

(ア) 隣接するスピーカーを別回路とする方法

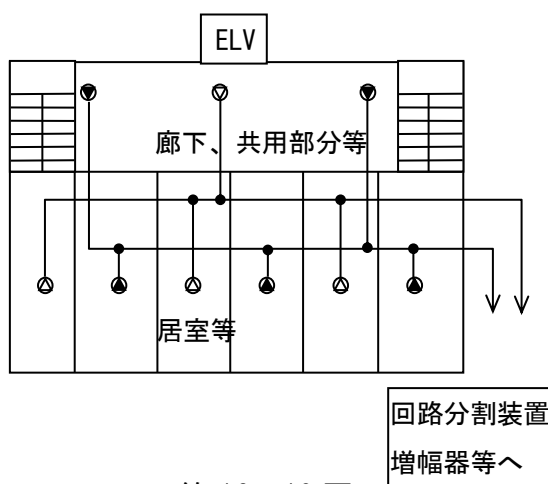
各回路に接続されるスピーカーは、おおむね同数となるように配置すること。

(イ) 居室部分と廊下等の共用部分を別回路とする方法



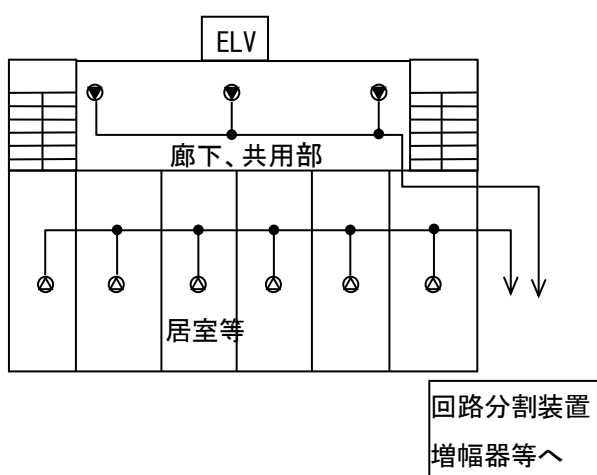
第16-9図

隣接するスピーカーを複数回線化した例



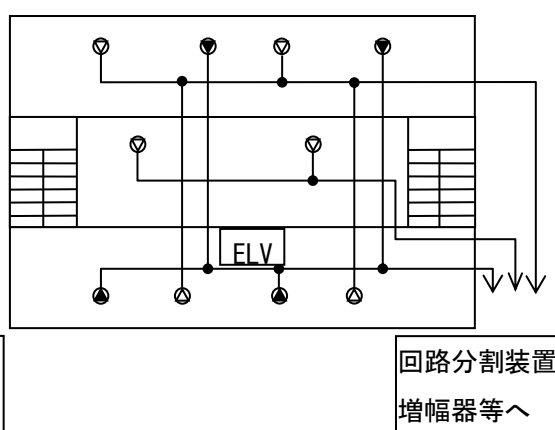
第16-10図

隣接するスピーカーを複数回線化した例



第16-11図

居室と共用部分を複数回線化した例



第16-12図

一報知区域を3分割した例

エ 回路分割装置

回路分割装置は、次に適合すること。

(ア) 機器

- a 各出力回路は、一の回路が短絡した際、他の回路に影響を及ぼさない措置が講じられていること。
- b 一の回路分割装置の出力回路の短絡表示が分割された個々の回路ごとに表示されること。
- c 当該放送設備の性能特性に適合するものであること。

(イ) 設置位置

- a 原則として階ごとに設置すること。
- b 防火上有効な場所に設置するか、又は不燃性のボックスに入れる等の措置を講ずること。

なお、回路分割装置の外箱が不燃性の素材で造られているものは、不燃性のボックスと同等として取り扱うことができる。

- c 点検に支障ない場所に設けること。

(ウ) 短絡表示

一の回路分割装置の分割された出力回路のすべてが短絡した場合、操作部でその旨が確認できるものであること。

(5) 起動装置

起動装置とは、火災が発生した際、手動操作により音響装置を鳴動し又は増幅器等に火災である旨の信号を送ることができる非常電話、非常用押しボタン（発信機を含む。）をいい、次に適合すること。

なお、放送設備が自動火災報知設備と連動している場合は、起動装置を省略することができる。ただし、省令第25条の2第2項第2号の規定により設置を要する通話装置（通話装置として使用する非常電話を含む。）は省略することができない。

ア 非常用押しボタン

(ア) 設置位置

- a 多数の者の目にふれやすく、かつ、操作の容易な場所に設けること。
- b 操作上支障となる障害物がない箇所に設けること。
- c 原則として階段への出入口付近に設けること。
- d その他、第5章第12自動火災報知設備6（2）によること。

(イ) 機器

- a 告示基準に適合したものとし、認定品を使用すること。
- b 手動により復旧しない限り正常に作動が継続できるものであること。

イ 非常電話

非常電話とは、起動装置として用いる電話をいい、操作部（親機）、非常電話機（子機）、表示灯、電源及び配線で構成される。

(ア) 設置位置

- a 操作部（親機）
 - (a) 防災センター等の常時人のいる場所に設けること。
 - (b) 増幅器等及び自動火災報知設備の受信機に併設して、それぞれ操作が有

効に行える位置に設けること。

(c) 制御部（電話交換機部分）と操作部が分割されているものは、原則として同一室内に設けること。

b 非常電話機（子機）

(a) ア（ア）に準じること。

(b) 廊下等で、自動火災報知設備の発信機、連結送水管の放水口、非常コンセント設備等に併設して設けること。

(イ) 機器

a 告示基準に適合するものとし、認定品を使用すること。

b 非常電話機は、送受話器を取り上げることにより、自動的に操作部への発信が行われるものであること。

c 業務用電話と兼用されるものは、非常電話として起動した場合、業務用電話の機能を遮断するものであること。

d 非常電話機は、放送機能を有しないこと。

e 操作部は、非常電話機の発信により放送設備を自動的に起動することでもできるものであること。

f 操作部は、非常電話機の発信により火災信号音が鳴動するものとし、発信階を表示すること。

g 操作部は、非常電話機の発信を受信した場合、送受話器を取り上げる等簡単な操作で火災音信号を停止し、発信を行った非常電話機と相互に同時通話できること。

h 操作部は、2つの非常電話機との三者通話も可能であること。

i 非常電話機の回線が短絡又は断線しても、他の回線に障害が波及しないこと。

j 非常電話機の収納箱及び操作部の外箱は、厚さ 0.8 mm以上の鋼板又はこれと同等以上の強度及び難燃性を有すること。

k 放送設備を起動する場合、操作部と増幅器等との連動方式は、無電圧メーク接点により相互の機能に異常を生じないこと。

(ウ) 表示

a 操作部（親機）には、白地に赤文字で「非常電話盤」と表示すること。

b 非常電話機（子機）には、赤地に白文字で「非常電話」とし、放送設備の起動装置である旨を表示すること。

(6) 通話装置

通話装置とは、起動装置に附置する防災センター等と通話できる装置をいう。

ア 設置位置

(ア) 操作部（親機）

イ（ア）aに準ずること。

(イ) 通話装置（子機）

起動装置（非常用押しボタン）に併設して設けること。ただし、放送設備が自動

火災報知設備と連動し起動装置を省略している場合には、自動火災報知設備の発信機に併設して設けること。

イ 機器

(ア) 告示に定められる次の基準に適合するものであること。◆

- a 操作部との間の専用回路であること。
- b 周囲雑音を 60dB とした場合において有効に通話することができるものであること。
- c 二以上の通話装置が操作されても、操作部において任意に選択が可能であること。この場合遮断された通話装置には話中音が流れるものであること。
- d 通話装置と操作部は、相互に同時通話することができるものであること。
- e -10℃から 50℃までの周囲温度において機能に異常を生じないものであること。

(イ) 非常電話の認定品を使用すること。

ウ 表示

(ア) 非常電話の認定品を通話装置として設置する場合

- a 通話装置の操作部（親機）に、白地に赤文字で「非常電話盤」と表示すること。
- b 通話装置の電話機（子機）に、赤地に白文字で「非常電話」と表示すること。

(イ) 非常電話の認定品以外を通話装置として設置する場合

- a 操作部（親機）に、白地に赤文字で「非常通話盤」と表示すること。
- b 通話装置（子機）に、赤地に白文字で「非常通話装置」と表示すること。

(7) 表示灯

表示灯とは、起動装置の所在を明示するために設けられる赤色の灯火をいい、次に適合すること。

ア 設置位置

- (ア) 通行に支障のない場所で、かつ、多数の者の目にふれる位置に設けること。
- (イ) 天井面から 0.6m 以上離れた位置に設けること。
- (ウ) 取り付け面と 15 度以上の角度となる方向に沿って 10m 離れた場所から点灯していることが容易に識別できる位置に設けること。◆

イ 機器

(ア) 告示基準に適合したものとし、認定品を使用すること。

(イ) 雨水、腐食性ガス等の影響の受けるおそれがある場所に設置する機器は、適切な防護措置を講じること。

(ウ) 可燃性ガス、粉じん等が滞留するおそれがある場所に設置する機器は、防爆構造のものであること。

(8) 配線

第5章第3 非常電源によるほか、次によること。

ア 増幅器と操作部をそれぞれ異なった場所に設置する場合、増幅器から操作部ま

での配線は、耐熱配線とすること。ただし、増幅器から操作部又は操作部から増幅器に非常電源を供給する場合には、耐火配線とすること。

イ 遠隔操作器のみが省令第 25 条の 2 第 2 項 3 号ルに定める場所に設置される場合で、増幅器又は操作部から非常電源が供給される場合の配線は、耐火配線とすること。

ウ 増幅器等からスピーカーまでの配線は、火災の際、一の報知区域の配線が短絡又は断線しても、他の報知区域への火災の報知に支障がないように設けること。

エ 放送設備のスピーカーを業務用の放送設備と兼用するもので、スピーカー回路を切り替える方式の制御配線は、当該回路に異常がある場合、スピーカーは非常用回路に接続される方式とすること。

オ 放送設備の起動により業務用の放送設備等を停止する場合の制御配線（増幅器等が設置される居室外の配線）は、当該回路に異常がある場合には、業務用の放送等が停止される方式とすること。

カ 電線の接続等は、はんだ付け、ネジ止め、圧着端子等で行われていること。

（９）相互通話設備

相互通話設備とは、省令第 25 条の 2 第 2 項 3 号ヲにより、一の防火対象物に 2 以上の操作部又は遠隔操作器が設けられている場合、当該操作部相互間に設ける同時通話ができる機器をいい、次に適合すること。

ア 設置位置等

（ア）操作部又は遠隔操作器の設けられている直近で、当該機器の操作に有効な位置であること。

（イ）床面からの高さが 0.8m 以上 1.5m 以下の箇所に設けること。

（ウ）相互通話設備として、次のいずれかの設備が設けられていること。

- a インターホーン
- b 非常電話
- c 発信機（P 型 1 級）
- d 構内電話で非常用の割り込み機能を有するもの

イ 機器

（ア）一の送受話器を取り上げ又は選局スイッチを操作する等容易な方法により、自動的に一方の機器への発信が可能なものであること。

（イ）一の送受話器の発信により、一方の機器への呼び出し音が鳴動するとともに、表示装置が設けられているものは、当該表示が有効に点灯すること。

ウ 常用電源

（１）ア（イ）を準用すること。

エ 表示

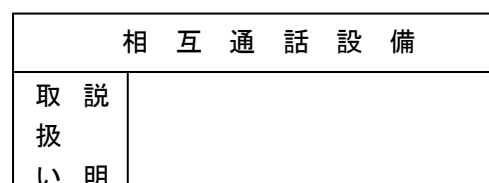
（ア）非常電源の開閉器の見やすい箇所に赤色で相互通話装置である旨の表示をすること。

（イ）通話設備の電話機又は直近には、第 16—13 図の表が貼付されていること。

電話（ダイヤル）方式の場合



選局スイッチの場合



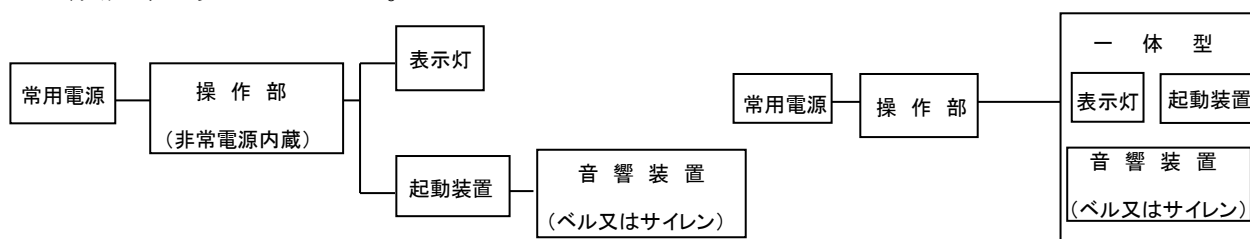
第 16－13 図

(10) 総合操作盤

第 5 章第 2 屋内消火栓設備を準用すること。

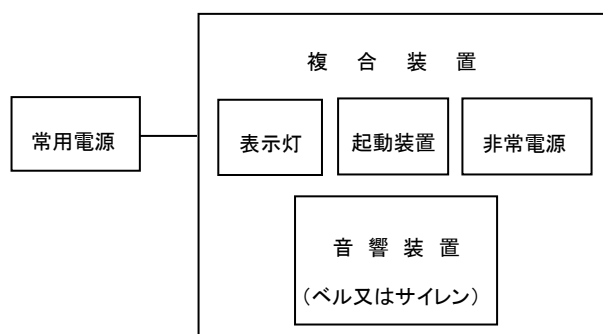
3 非常ベル、自動式サイレン

非常ベル、自動式サイレンは、人が火災を発見した場合、起動装置を手動で操作することにより、警報音を鳴動させるものであり、構成は第 16－14 図のとおりであり、機能等は次によること。



構成例 1（单品組み合わせ）

構成例 2（一体型）



構成例 3（複合装置）

第 16－14 図 非常ベル又は自動式サイレンの構成例

(1) 操作部

操作部とは、起動装置から火災である旨の信号を受信し、火災である旨の警報を必要な階に自動的又は手動操作により報知できる装置をいい、次に適合すること。

ア 常用電源

2 (1) アを準用すること。

イ 非常電源及び非常電源回路の配線は、第5章第3 非常電源を準用すること。

ウ 設置場所

(ア) 点検に便利な場所に設けること。

(イ) 温度、湿度、衝撃、振動等の影響を受けるおそれのない場所に設けること。

(ウ) 起動装置の設けられた操作部にあっては、操作の容易な場所に設けること。

(エ) 多回線用の操作部等にあっては、守衛室等常時人のいる場所に設けること。

エ 機器

(ア) 告示基準に適合するものとし、認定品を使用すること。

(イ) 1 回線に接続できる表示灯又は音響装置の個数は、各 15 個以下であること。

(ウ) 自動火災報知設備と連動する場合は、無電圧メーク接点により、相互の機能に異常を生じないものであること。

オ 表示

多回線用の操作部又は地区表示灯を設けた複合装置には、報知区域の名称等が適正に記入されていること。

(2) 音響装置

音響装置とは、起動装置又は操作部の操作により鳴動するもので、火災である旨の警報ベル、サイレン又はこれと同等以上の音響を発する機器をいい、次に適合すること。

ア 設置位置

(ア) 音響効果を妨げる障害物のない場所に設けること。

(イ) 取り付け高さは、天井面から 0.3m 以上で床面から 1.5m 以上の位置に設けること。ただし、起動装置と一体になっているものは、起動装置の基準によること。

(ウ) 損傷を受けるおそれのない場所に設けること。

(エ) 屋上部分を遊技場、ビアガーデン等の目的で使用する防火対象物は、当該部分に音響装置を設けること。

(オ) 共同住宅等にあっては、努めて、2 階層ごとのバルコニー側に音響装置を増設すること。この場合、音響装置の個数は、1 回線につき 15 個以下とする。

イ 機器

(ア) 告示基準に適合するものとし、認定品を使用すること。

(イ) 開放廊下等の雨水の影響を受ける場所及び腐食性ガス等の影響を受ける場所に設置する機器は、適切な防護措置を講じたものであること。

(ウ) 可燃性ガス、粉じん等が滞留するおそれがある場所に設置する機器は、防爆

構造のものであること。

ウ 報知区域

(ア) 地階を除く階数が5以上で延べ面積が3,000㎡を超える防火対象物にあっては、出火階、直上階等の区分鳴動、当該規模以外の防火対象物は一斉鳴動が有効であること。◆

(イ) 複合装置にあっては、任意の複合装置（起動装置）を操作した場合、音響装置が一斉鳴動するものであること。ただし、(ア)の規模の防火対象物にあっては区分鳴動が有効であること。◆

(ウ) (ア) 及び (イ) で、鳴動方式を区分鳴動とした場合で、警報停止の操作がされないで一定の時間が経過した場合には、当該防火対象物の全域に報知できるものであること。なお、一定の時間は、4分とする。

(3) 起動装置

ア 設置位置

2 (5) ア (ア) を準用すること。

イ 機器

2 (5) ア (イ) を準用すること。

(4) 表示灯

2 (7) を準用すること。

(5) 複合装置

複合装置とは、起動装置、表示灯、音響装置をそれぞれ任意に組み合わせて一体として構成したものに非常電源を内蔵したものをいい、次に適合すること。

ただし、内蔵した非常電源により他に電力は供給しない。

ア 設置位置

(1) から (4) に掲げる基準に適合すること。

イ 機器

(ア) (1) から (4) に掲げる基準に適合すること。

(イ) 1回線に接続できる個数については、20以下であること。

(6) 一体型

一体型とは、起動装置、表示灯、音響装置を任意に組み合わせ一体として構成したものをいい、(1) から (4) に掲げる基準に適合すること。

(7) 配線

第5章第3 非常電源によるほか、次によること。

ア 出火階直上階鳴動方式の場合には、一の報知区域の配線が短絡又は断線しても、他の報知区域への火災の報知に支障のないように設けること。

イ 複合装置の常用電源の配線と連動端子間（弱电回路）の配線を同一金属管に納める場合は、次によること。

(ア) 非常警報設備以外の配線は入れないこと。

(イ) 連動端子間の配線は、600V 2種ビニル絶縁電線等で強電用電線を使用すること。

- (ウ) 常用電源線と連動端子間の電線とは、色別すること。
- ウ 端子との接続は、ゆるみ、破損等がなく確実であること。
- エ 電線相互の接続は、はんだ付け、ネジ止め、圧着端子等で行われていること。

4 付属品

付属品として、次のものを備えておくこと。

- (1) 取扱い説明書
- (2) 予備品（ヒューズ、電球その他の消耗品）
- (3) 回路図
- (4) 工具（クロスバ方式の非常電話にあっては、調整用機器、その他のものにあつては、当該機器の部品の交換に必要な特殊な工具）